

資料編

- I 飼育展示していく動物種について
 - (1) 飼育展示動物種の分類の考え方
 - (2) 飼育展示動物種の分類について
- II 市民動物園会議における意見交換
- III パブリックコメントの実施結果

I 飼育展示していく動物種について

(1) 飼育展示動物種の分類の考え方

飼育していく動物種を検討するうえで、円山動物園で飼育する意義として「保全」と「教育」を、円山動物園で飼育展示していくために必要な条件として「動物福祉の確保」と「飼育の継続性」をあげ、この4つの観点を、ABCのランクに評価したものを参考としながら、代替種の有無、効率的な資源配分等を考慮して総合的に判断します。

	A	B	C
保全 ※現在の生息状況や生息地の状況を踏まえた将来的な予測に基づく絶滅が危惧される度合い、国内外における保全の取組状況の観点などから判断しランク付けします。	<ul style="list-style-type: none"> 海外希少種のうち、円山動物園が積極的に取り組む必要があると考えられる種 国内希少種のうち、円山動物園が積極的に取り組む必要があると考えられる種 	<ul style="list-style-type: none"> 海外希少種及び国内希少種のうち、国内個体数が安定していて、現時点で円山動物園が積極的に取り組む必要はないと考えられる種 海外普通種・国内普通種のうち、国内個体群が不安定で円山動物園が積極的に繁殖に取り組むべき種 道内固有の普通種(亜種含む) 国内普通種のうち、北海道レッドリストまたは環境省レッドリストで準絶滅危惧以上の種 特殊な家畜種(北海道ならではの家畜等) 	<ul style="list-style-type: none"> 海外普通種 国内普通種 普通の家畜種
教育 ※環境教育や生物学などの科学教育の観点、人と動物の関わりを学ぶうえでの観点、情操教育の観点などから判断しランク付けします。	<ul style="list-style-type: none"> 道内生息種 国内希少種 海外希少種 その他上記と関連した解説に有用な種 道内外来種等、特別な教育活動が可能な種 ふれあいや体験プログラムに有用であり、他に代えがたい種 	<ul style="list-style-type: none"> 国内普通種 海外普通種 ふれあいや体験プログラムに有用である種 	/
福祉 ※飼育面積・体制の確保などにより、動物福祉の充実・向上に取り組むことができるかどうかを判断しランク付けします。	<ul style="list-style-type: none"> 主にハード面において、現状でも十分福祉レベルを満たしている種 	<ul style="list-style-type: none"> 主にハード面において、若干の規模拡大で十分な福祉レベルを確保できる種 他種との混合飼育などにより、広いスペースを共有可能な種 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉レベルを向上するには大幅な施設改修が必要な種 他種との混合飼育が不可能であり、より優先されるべき種とのスペース競合が起こる種
継続性 ※継続的な飼育を維持するために、寿命などを考慮し、将来的にも適正な飼育頭数、遺伝子の多様性を維持することができるかどうかを判断しランク付けします。	<ul style="list-style-type: none"> 「寿命」「繁殖可能期間」「血統」「国内外からの導入可能性」等を考慮して飼育の継続性が高い 	<ul style="list-style-type: none"> 「寿命」「繁殖可能期間」「血統」「国内外からの導入可能性」等を考慮して飼育の継続性が中程度である 	<ul style="list-style-type: none"> 「寿命」「繁殖可能期間」「血統」「国内外からの導入可能性」等を考慮して飼育の継続性が低い

用語説明 (ここではこのように定義いたします)

海外希少種: IUCNレッドリストのカテゴリで絶滅危惧Ⅱ類以上の種 海外普通種: IUCNレッドリストのカテゴリで準絶滅危惧以下の種

国内希少種: 種保存法での国内希少野生動物植物種、または環境省レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類以上の種

国内普通種: 国内希少種以外の国内に生息する種

(2) 飼育展示動物種の分類について

推進種・・・積極的に繁殖に取り組む種（25 種）

継続種・・・状況に応じて繁殖に取り組む種（107 種）

断念種*・・・やむを得ず飼育を断念する種（34 種）

〔2019 年（令和元年）10 月 30 日時点〕

※断念種については、その種の生態、個々の動物の年齢や健康状態、繁殖の可能性等を考慮しながら、動物福祉の充実または飼育個体群の保全等につながる事が期待できる他の動物園・水族館への移動を積極的に検討します。したがって、移動により、長期にわたる低福祉状態が予想される場合など、保全上の必然性と当該個体の福祉の維持が見合わない場合は、円山動物園で福祉に配慮した飼育展示を継続することとし、当該動物が寿命を全うした後は、当該動物種の新規導入を行わないこととします。

※種名に下線がある種は、現在円山動物園では飼育展示していない。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
推進種	積極的に繁殖に取り組む種(推進種) 保全、教育及び円山動物園の果たすべき役割の観点から特に必要性が高く、かつ、動物の福祉の確保と飼育の継続性の両方について実現が可能と判断される動物種については、今後とも、国内外の動物園・水族館等と連携し積極的に繁殖に取り組みます。特に円山動物園で飼育する意義の強い動物種についても、課題の解決を図りながら、積極的に繁殖に取り組めます。					
	ボルネオオランウータン	A	A	C	B	森林伐採などの影響で絶滅の危機にあり、アジア各国の連携により動物園における保全活動が行われている。国内 12 園館で飼育されているが、飼育園で密接に連携して飼育個体群の保全に取り組んでいく必要があり、その中で円山動物園の果たすべき役割は非常に大きい。また、森林伐採の原因となるパーム油の生産は我々の生活にも密接に関わっており、環境教育活動を行うにあたり代えがたい役割を担っている。一方で飼育施設は老朽化が著しく、また狭隘であることから、高い動物福祉水準の確保及び繁殖の推進のためには施設の大幅な改善が必要である。
	マンドリル	A	A	B	B	生息地の破壊や食肉目的の密猟などで絶滅の危機に瀕しており、保全教育上の重要性が高い。国内個体群は横這いとなっているが、遺伝的多様性の維持のためには飼育下繁殖の推進、個体数の増大が不可欠であり、当園も飼育園としての役割を果たすことが求められている。
	スダスローロリス	A	A	A	B	生息地の破壊やペットとしての密猟等で絶滅の危機に瀕しており、保全教育上の重要性が高い。国内個体群は横這いとなっているが、遺伝的多様性の維持のためには飼育下繁殖の推進、個体数の増大が不可欠である。当園は国内で最もスダスローロリスの繁殖に成功しており、今後も、飼育園としての役割を果たすことが求められている。
	アムールトラ	A	A	A	B	ネコ科最大の動物で、生息地の破壊等により野生の個体数が 500 頭程度と推測され、保全の必要性が高い。また、寒冷な地域を主な生息地としていることから、似通った気候の北海道では飼育環境としても適している。海外からの導入のためには国内の繁殖実績が必要となるため、今後の個体群維持のためには継続した繁殖への取組が必要である。
	ユキヒョウ	A	A	B	B	生息環境の悪化や密猟により絶滅の危機に瀕している。国内では、12 園館で飼育されており、(公社)日本動物園水族館協会(以下 JAZA)から積極的な繁殖を求められている。当園では、これまでに複数回のユキヒョウの繁殖に成功しており、飼育園の中で円山動物園の果たす役割は大きい。
	ホッキョクグマ	A	A	A	B	円山動物園は日本国内のホッキョクグマ飼育繁殖における中心的な役割を担っており、国内個体群維持における影響が非常に大きい。また、本種は地球温暖化問題の象徴的な動物であり、本種を通じた環境教育活動の効果は高い。海外との連携及び飼育動物の福祉向上を目的として新施設を整備しており、新規個体の導入は国内外ともに容易ではないものの、飼育下繁殖を積極的に進めていく。
	アジアゾウ	A	A	A	B	陸上最大の哺乳類だが、密猟や生息環境の悪化・分断により生息数は減少し絶滅の危機に瀕している。円山動物園ではゾウの福祉に配慮でき、研究にも取り組める体制を整えていることから、今後繁殖に取り組むとともに、ゾウの保全に寄与できるようゾウの疾病や人工授精、生理学的研究を進めていく。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
推進種	道内産トガリネズミ類	A	A		B	国内に広く生息する一方、環境変化に脆弱な種であり、動物園などにおける飼育知見はほとんど蓄積されていない。北海道固有種で絶滅危惧種に指定されている種もあり、種の保全に向けた、生態解明、飼育条件の研究、繁殖生理に関する研究等、動物園の特性、技術を活かした貢献が求められる。
	カンムリシロムク	A	A	A	B	インドネシアのバリ島のみが生息する鳥類であり、生息地の環境破壊等の影響で生息数が激減し、絶滅の危機に瀕している。横浜市繁殖センターが中心となり保全・繁殖に取り組んでいるが、保全及び教育上の重要性が高く、当園でも飼育園としての役割を果たすことが求められている。
	シマフクロウ	A	A	A	B	日本では北海道のみが生息する代表的な猛禽類の一種。生息地の環境破壊等の影響で生息数が激減し、絶滅の危機に瀕していることから、道内の動物園としてその保全の取組を行うとともに、本種の現状について啓発する必要がある種である。リスク分散のため、飼育園も多少増加傾向にあるが、当園の果たす役割は大きい。
	オオワシ	A	A	C	B	北海道を代表する希少猛禽類の一種である。生息地の破壊や獲物の減少等により生息数が減少し、絶滅の危機に瀕している。当園はJAZAのオオワシ種別計画管理園であり、その保全の取組を行うとともに、国内で当園の果たす役割は大きい。しかし、施設の老朽化により全面的に改修が必要であり、動物福祉の面においても規模拡大が必要となる。
	ミヤコカナヘビ	A	A	A	A	日本固有種であり、土地開発、農業による影響、人為的に移入されたインドクジャクやニホンイタチによる捕食などにより生息数は激減しており、絶滅の危機に瀕している。国内希少野生動物種としてJAZA及び環境省の連携事業により保護保全事業及び繁殖研究が行われており、当園は本事業における飼育下繁殖研究において中心的な役割を果たしていることから、当園において積極的に繁殖を進める必要がある。
	熱帯アジア産カメ類	A	A	A	B	熱帯アジア産のカメ類はそのほとんどが絶滅の危機にあり、国際的な生息域外保全が行われている。当園は熱帯アジア産カメ類について、複数の繁殖実績を有することから、今後国内個体群の形成にあたっては、中心的な役割を果たすべき園の一つとなっている。 (ヒラタヤマガメ、スピングラーヤマガメ、インドセタカガメ、ハミルトンガメ、ジャンメイシガメ、ヨツメイシガメ、モエギハコガメ、ヒラセガメ)
	サイイグアナ	A	A	A	C	絶滅危惧種であり、国際的な域外保全の取組が行われている。当園で飼育している個体はドイツの動物園との共同繁殖計画により入手した個体であり、繁殖体制も整っていることから、今後積極的に繁殖を進める必要がある。
	マレーガビアル	A	A	A	B	絶滅危惧種として保全が求められる種であり、日動水のJCP種にも指定されている。大型種であることから飼育園館が少なく、当園のように複数の飼育場所を有する園館は限られることから、当園が積極的に繁殖を進める必要がある。
	ヨウスコウワニ	A	A	A	B	絶滅危惧種として保全が求められる種であり、日動水のJCP種にも指定されている。当園は国内で唯一の繁殖実績を有し、本種の個体群維持増大において、積極的に繁殖を進める必要がある。
	クモノスガメ	A	A	A	B	絶滅危惧種であり、国内飼育個体の多くは密輸摘発個体である。域外保全としてはもちろん爬虫類の密輸問題についての教育を行っていくうえでも重要な種であり、個体群維持のため、積極的に繁殖を進める必要がある。
	アオホソオトカゲ	A	A	A	B	インドネシアのバタンタ島にのみ生息する固有種であり、近年絶滅が危惧されている。域外保全としてはもちろん分類学的に必要な種であり、当園はJAZA加盟園で初めて繁殖に成功した園に贈られる繁殖賞を受賞していることもあり、積極的に繁殖を進める必要がある。
ニホンザリガニ	A	A	A	A	北海道及び東北の一部にのみ生息する日本の固有種であり、開発や外来種による圧迫等の影響により生息域が縮小している。札幌市内にも生息する種であり、水辺生態系の保全についての教育を展開するうえで効果的な題材となる種である。当園ではこれまで本種の飼育下繁殖・育成技術及び将来的な野生復元技術の確立を目指して取り組むとともに、市民向けのシンポジウム等を開催し、本種の保全、水辺生態系の保全、外来種対策の推進等の教育活動を行っているところであり、引き続きこれらの事業を継続するため、積極的に繁殖の取組・研究を行う。	
継続種	状況に応じて繁殖に取り組む種(継続種) 保全または教育、円山動物園の果たすべき役割の観点から必要性があると判断し、かつ、動物の福祉の確保と飼育の継続性の両方について実現が可能と判断される種については、今後とも飼育を継続し、状況に応じて繁殖に取り組みます。					
	オオカンガルー	C	B	B	A	円山動物園の中で唯一の有袋類であり、哺乳類の進化を伝えるうえでも必要な種である。また、オーストラリアでは、駆除方法の議論や肉や皮の利用についてなど、人間と動物との関わり方について考えてもらう教材として教育的価値が高い。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	ワオキツネザル	B	A	B	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、マダガスカルでの自然保護における象徴的な動物の一つであり、教育上の重要性も高い。しかし、動物福祉が十分とは言えず、福祉の向上のためには同様の役割を担えるエリマキツネザルとの比較検討を要する。国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であるため、必要に応じて繁殖に取り組む。
	シロテテナガザル	B	A	A	B	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの熱帯雨林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。また、その特徴的な生態や運動能力により展示効果も期待される。一方で国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であることから、必要に応じて繁殖に取り組む。
	チンパンジー	B	A	B	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカの熱帯雨林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。また、その特徴的な生態や運動能力により展示効果も期待される。一方で国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であるが、将来にわたっての遺伝的多様性の確保や、個体群の維持のため、繁殖に取り組む。
	シシオザル	B	A	B	B	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの森林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、動物福祉が十分とは言えず、福祉の向上のためには同様の役割を担えるクロザルの飼育との比較検討を要する。国内での飼育下繁殖は順調かつ、個体群規模も十分であるため、必要に応じて繁殖に取り組む。
	ダイアナモンキー	B	A	B	C	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカ熱帯雨林の現状等教育的な重要度も高い。国内個体群は減少傾向にあり、海外からの導入の可能性が低いものの、可能な限り積極的に維持すべき種である。
	ニホンザル	C	A	B	A	日本固有種であるが野生の生息数は多く基本的に保護の対象とはされていない。しかし、日本人になじみが深く、また、人との間に多くの関りがあるため、教育的価値が高い。飼育の持続の面では、他園館で飼育されている個体数は多いが、群れに新個体を導入することが難しいため、飼育個体を中心とした繁殖計画を立てる必要がある。
	リスザル	C	B	B	A	南米原産のサルとして、その形態や生態を説明する動物としての教育的効果は高い。国内個体群は比較的安定していることから、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	フサオマキザル	C	B	B	A	南米原産のサル類の一つで、大型類人猿を除き、唯一野生個体での道具の使用が確認されているほか、介助用動物として使役されることもあるなど、霊長類の知能や進化の観点で教育上の有用性が高い。国内個体群は比較的安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ドグエラヒビ	C	B	B	A	アフリカ原産のサル類であり、当園で飼育するサル類のうち、唯一の草原性のサルである。国内個体群は安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ブラッザグエノン	C	B	B	B	アフリカ原産のサル類であり、ダイアナモンキーと同じく、森林の樹上高所に生息するサル類である。国内個体群は安定しており、喫緊の繁殖の必要性はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	シセンレッサーパンダ	B	A	A	A	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アジアの森林の現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。国内個体群は安定しており、JAZAの繁殖計画を踏まえ、必要に応じて繁殖に取り組む。
	キリン	B	A	C	A	生息地の破壊や生息地における内乱等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカのサバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、動物福祉の確保及び繁殖の推進のためには、施設の大幅な改善が必要である。今後はJAZAの繁殖計画を踏まえ、必要に応じて繁殖に取り組む。
	カバ	B	A	A	B	生息地の破壊や生息地における内乱等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性が高く、アフリカの人と動物の関係を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、国内飼育個体の約半数が高齢個体となっている。今後 JAZA 種別計画においては、高齢個体の死亡数が多くなると予測される 2022 年を目途に中期的な繁殖計画を行うとされており、この計画に則って個体群の維持に協力していく。
	グラントシマウマ	B	B	C	A	アフリカの草食獣の代表的な種であり、特徴的な体色から広く知られており、アフリカのサバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性が高い。しかし、動物福祉が十分とは言えず、同様の役割を担えるエランドとの比較検討を要する。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ダチョウ	C	B	B	A	世界最大の鳥類であり、飛ばない鳥としても知られており、代替種は少なく、生態学的な教育的価値は高い。展示個体確保の観点から必要に応じて導入・繁殖を計画する。
ライオン	B	B	B	A	アフリカの食物連鎖の頂点に立つ動物として広く知られており、命の循環を伝えるのに有用な種である。国内では広く飼育されており、積極的に繁殖に関わる意義はそれほど高くない。また、本来群れで暮らす動物であるにも関わらず、単頭飼育となっており、動物の福祉の確保が十分とは言えず、同様の役割を持つ動物であるハイエナとの比較検討を要する。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	ミーアキャット	C	B	B	A	アフリカの小型肉食獣としてアフリカの生物多様性を伝えるために有用な種である。現状国内個体群は比較的安定していることから、状況に応じて繁殖に取り組む。
	ハダカデバネズミ	C	A	A	A	真社会性をもつ哺乳類として非常に特徴的な動物。アフリカの生物多様性を説明するために有効である。一定数での群れ飼育が可能な種であることから、持続的な展示を目的とした飼育・繁殖を行う。
	ムツオビアルマジロ	C	B	B	B	当園唯一の被甲目であり、その特異な形態から認知度は高く、南米生態系を構成する要素として教育的な価値は高い。商業流通もあることから、急ぎ繁殖に取り組む必要はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	アカハナグマ	C	B	B	B	当園で飼育する南米原産動物のうち、唯一の食肉目であり、南米生態系を構成する要素として教育的な価値は高い。採食・探索行動などが活発にみられるなど高い展示効果を有する。商業流通もあることから、急ぎ繁殖に取り組む必要はないが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	マレーグマ	B	A	B	B	クマの中では最も小さな種で、特徴的な鉤爪を有する。現地では生息地の消滅、農作物被害の害獣として駆除、食肉を目的とした密猟など、人と動物の関わり方について考えてもらう教材として教育的価値が高い。ただし、国内の飼育個体数は少なく、国内個体群の維持は難しい状況である。当園では、種別管理計画による繁殖を目指しつつも、余剰個体の受け入れ先として機能を果たすことも検討する。
	マレーバク	B	A	C	B	アジアの熱帯雨林を代表する種のひとつと言える。ただし、国内での今後の飼育個体数維持は難しい状況である。現在の動物舎は旧動物舎を参考に面積配分されており、繁殖を行うためには、動物福祉が十分とはいえない。種別管理計画の意向も考慮しながら、余剰個体の受け入れ先としての機能を果たすことも検討する。
	コツメカワウソ	B	A	B	A	熱帯雨林や河川の開発により生息数が減少した種であり、また、ペットとして密輸されることもあるため、人と自然環境の関係についての教育に有用である。しかし、現行の施設はプールが1面しかないことから、動物福祉が十分とはいえず、隣接するアジアアロワナとの比較検討を要する。
	エゾヒグマ	B	A	B	B	北海道の野生動物であり、道内の動物園として、地元の生物多様性、人と野生動物の関係性のあり方など、来園者に伝えるべきメッセージは多い。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	エゾシカ	B	A	B	B	北海道を代表する野生動物であり、また近年は生息数の増加による人との軋轢が生じている種であり、野生動物管理・資源の有効利用等の観点から教育上の有用性は高い。飼育の持続性も十分に期待できることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ゴマフアザラシ	B	A	A	A	道内近海に回遊する種であり、人間の経済活動との軋轢など教育的な役割が大きい点ではゼニガタアザラシと同様であるが、資源の効率的な配分の観点から、ゼニガタアザラシと比較し、海水を接点としたホッキョクグマとの関係性から教育的な役割が高いこと、飼育園館が多く個体流動性が高いことから、本種を継続種として維持することとする。
	エゾタヌキ	B	A	B	B	北海道を代表する野生動物の一種であり、近年はアライグマ等の外来生物に圧迫され、生息状況の悪化が懸念されている。喫緊の域外保全の必要性は低いですが、北海道に生息する哺乳類の展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	エゾリス	B	A	A	B	北海道を代表する野生動物の一種であり、市内の公園にも生息している市民にとってなじみ深い動物である。喫緊の域外保全の必要性は低いですが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	エゾキウサギ	B	A	C	B	国内唯一のエゾキウサギの仲間であり、北海道の生物多様性と独自性の観点における教育上の重要性が高い。現在は繁殖により飼育数が急増し、飼育施設が狭隘になっていることから、これを解決しつつ、必要に応じた累代繁殖を継続する。
	エゾモモンガ	B	A	C	B	国内では円山公園を含む道内全域に生息する道内固有亜種であり、木々の間を滑空する等のなど特徴を有するなど教育上の価値も高い。必要に応じた累代繁殖による個体確保が必要だが、現在の施設は狭隘で、動物福祉上の観点から改善が必要である。
	ヒツジ	C	B	B	A	家畜種であり、種の保全としての意義は低いですが、性格も温厚であり、ふれあうこともできるため、動物への接し方や命の教育など情操教育を行ううえで必要な種である。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	カイウサギ	C	B	B	A	家畜として改良された動物で、国内・国外ともに広く飼育されている。動物への接し方や命の教育など情操教育を行ううえで必要な種であるが、ふれあいのためには個体数の増加やスペースの確保が必要となる。ふれあい種として妥当か及び代替種の検討を行い、必要に応じて繁殖に取り組む。
アライグマ	C	A	B	A	特定外来種として、人間がペットとして持ち込んだ動物が生態系を破壊するという問題について考えてもらう大きな役割を担う。特定外来種でもあり野生下での繁殖も確認されていることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。	
ニワトリ	C	B	A	A	品種改良を加えられた家禽種であり人の食物として利用されていることもあり、命や人と動物との関わりについて伝える動物として教育的価値が高い。入手も容易であることから、当園では必要に応じて繁殖に取り組む。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	モルモット	C	A	B	A	家畜として改良された動物で、国内・国外ともに広く飼育されている。ふれあい動物として適当で、また、家畜としての歴史も有することから、教育的価値が高い。家畜種であることから種の保全としての意義は低い、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	北海道産ネズミ類	B	A	B	A	身近に生息しながら認知されづらい種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。累代繁殖による個体群の形成にあたっては若干の施設拡充が必要である。
	エゾクロテン	B	A		B	かつては道内全域に生息していたが、毛皮目的の乱獲により個体数が減少したほか、毛皮目的で持ち込まれたホンドテン(キテン)が一部野生化・定着し、交雑も懸念される。繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立は必要であり、個体群の確立を目指し必要に応じて繁殖に取り組む必要がある。
	エゾオコジョ	B	A		B	かつては道内全域に生息していたが、毛皮目的の乱獲個体数が減少したほか、イタチ、ミンク等に圧迫され、生息域が減少している。北海道レッドデータブックでは絶滅危惧種にカテゴリされており、保全の必要性は高い。これまで道内で安定した飼育管理に成功しておらず、将来に向けた飼育技術・繁殖技術確立のための研究が必要である。
	北海道産小型鳥類	B	A		B	傷病保護個体のうち、野生復帰困難な個体が一定数存在することから、終生飼養及び北海道の生物多様性教育の一環として、継続的に展示を行う。他種との混合展示が可能であり、異なる生態を持つ鳥類の展示が期待できる。
	北海道産コウモリ	B	A	B	B	身近に生息しながら、あまり認知されていない種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。また、飼育管理、繁殖等の研究がほとんど行われておらず、将来的な保全の取組に備えた各種研究が不可欠である。なお必要な飼育スペースは比較的小さいことから、累代繁殖による個体群の形成も可能である。
	フンボルトペンギン	B	A	C	A	産卵地(グアノ層)の燃料採取を目的とした破壊や漁業における混獲、採餌対象魚の競合などにより、生息環境の悪化が指摘されている。円山動物園唯一のペンギン目の鳥であり、高い教育効果も期待できる。一方で飼育施設の老朽化及び狹隘により、今後益々求められる動物福祉水準を確保するためには施設の大規模な改善が必要である。国内においては飼育下繁殖手法が確立され個体群規模も十分であることから、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ユーラシアワシミミズク	B	A	B	B	北海道において迷鳥または一部地域においては繁殖も確認されているが、生息数はごく少数である。性質が安定しており体験プログラム用の鳥として非常に有用であるとともに、北海道の生物多様性の普及啓発においても有用な種であることから、国内個体群の状況を踏まえ、必要に応じて繁殖に取り組む。
	オジロワシ	B	A	C	B	生息地の破壊等により減少傾向にあり保全が必要な北海道を代表する猛禽類の一種であり、鉛中毒や風力発電施設への衝突事故等、人の経済活動等による野生動物の圧迫に関する教育の題材として重要性が高いが、動物福祉上十分な飼育スペースの確保にあたり推進種であるオオワシと比較検討し、必要に応じて繁殖に取り組む。
	オオタカ	B	A	B	B	道内生息種として繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。現状の動物福祉の面での問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖に取り組む。
	トビ	C	A	B	B	道内生息種として繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。また、本種を用いた体験プログラムや鷹匠体験の訴求効果が非常に高いこと、現状の動物福祉の面での問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖に取り組む。
	エゾフクロウ	B	A	B	B	北海道に生息する代表的な猛禽類の一種であり、繁殖生理の解明など将来に備えた技術確立が必要である。本種を用いた体験プログラムの効果が非常に高いこと、現状の動物福祉の面での問題も少なく、飼育の持続性も良好であることから、飼育を継続し、飼育スペースの状況を見ながら必要に応じて繁殖に取り組む。
	ベニイロフラミンゴ	C	B	B	A	水辺の鳥類として広く知られている種であり、南米生態系の風景を構成する要素として有用な種である。また、特殊な形態や採食方法、さらに繁殖の様子が来園者からも観察しやすいなど、展示効果が高い。本種は長寿であり、繁殖についても一定規模以上の群れであれば安定して行われることから、国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	チリーフラミンゴ	B	B	B	A	水辺の鳥類として広く知られている種であり、南米生態系の風景を構成する要素として有用な種である。また、特殊な形態や採食方法、さらに繁殖の様子が来園者からも観察しやすいなど、展示効果が高い。本種は長寿であり、繁殖についても一定規模以上の群れであれば安定して行われることから、国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
ショウジョウトキ	C	B	B	A	南米原産の水辺の鳥類の一種で、群居性が強く他の鳥類の混合展示により、南米の生態系を表現するうえで有用な種。来園者の間近での営巣行動なども期待できることから展示効果も高い。国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。	
オニオオハシ	C	B	A	B	南米の森林生態系を代表する鳥類の一種で、外見も含めて認知度が高い。保全上の喫緊の必要性は低い、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	モモイロペリカン	B	B	B	A	アフリカからヨーロッパ、アジアに生息しており、特徴的な形態や行動から来園者に興味を持ってもらいやすく、園内での教育に有用な種である。今後、展示スペースの改修を検討するとともに、展示個体の確保を行う。
	タンチョウ	B	A	B	A	日本では北海道東部を中心に生息する、北海道を代表する鳥類であり、湿原の生物多様性を紹介するうえで欠かせない種である。なお、絶滅危惧種に指定されているものの近年は生息数が増加傾向にあるなど、喫緊に生息域外における保全を必要とする状況ではないが、道内の動物園としてリスク分散のための飼育等への協力を行う必要がある。
	エゾライチョウ	B	A		B	札幌市内の山林も含めた道内全般に生息する。十分な調査が行われていないが、生息地の開発や狩猟等による圧迫により生息域の縮小が懸念される。身近な野山の鳥類であるが道内園館での飼育は行われておらず、北海道の生物多様性教育の題材として有効であり、持続的な展示及び繁殖技術の確立を目的とした飼育・維持を行う。
	ゴイサギ	C	A	B	A	北海道の湖沼に生息する群居性の水鳥であり、群れでの展示や観覧間近での営巣の展示等が可能である。北海道の湖沼生態系を解説するうえで有用な種。他種との同居、一定数での群居が可能種であり、福祉上の問題点も解決しやすい。
	アオサギ	C	A	B	A	北海道の湖沼に生息する群居性の水鳥であり、群れでの展示や観覧間近での営巣の展示等が可能である。北海道の湖沼生態系を解説するうえで有用な種。他種との同居、一定数での群居が可能種であり、福祉上の問題点も解決しやすい。
	オシドリ	B	A	B	A	道内にも生息する水鳥の一つである。他種との混合展示を念頭に、北海道の湖沼生態系の多様性を示すうえで有用な種である。展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	ノスリ	C	A	B	B	国内普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低いが、福祉面での問題も少ないため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	シロフクロウ	B	B	B	B	北海道の一部で留鳥として見られる鳥であるが、喫緊の保全上の必要性は低い。特徴的な外観や北極圏・北方圏の生態系を解説するうえで有用性が高く、また、飞翔能力が高いことから体験プログラム用としても活躍が期待できる。 国内個体群は安定しており、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	北海道産両生類爬虫類	B	A	A	A	身近に生息しながら認知されづらい種として、北海道の生物多様性教育の観点で有効な種である。必要な飼育スペースは比較的小さいことから、累代繁殖による個体群の形成も可能である。
	ハウシャガメ	B	A	A	A	マダガスカルに生息する絶滅危惧種であり、ペット目的での密輸の対象種でもある。環境破壊により様々な生物が絶滅の危機に瀕するマダガスカルの現状を伝えるうえで有用であるとともに、爬虫類の密輸が絶えない現状を広く知ってもらううえで極めて有用な種である。現状国内個体群は比較的安定していることから、状況に応じた繁殖の取組が必要である。
	コウヒロナガクビガメ	B	B	A	B	ヘビクビガメ科の最大種であり、形態も特徴的で、爬虫類の多様な進化等、生物学的教育に有用な種。オーストラリア原産で、国内では当園でのみ飼育展示されている。国際的にも繁殖技術が確立されていないため、状況に応じて繁殖に取り組むべき種である。
	ミナミインドハコスッポン	C	A	B	B	当園で飼育する唯一のスッポンの仲間であり、生物学的な教育上有用な種である。また、密輸保護個体でもあることから、密輸に関する教育の面からみても展示する価値は高い。保全上の緊急性は低いが、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	チュウゴクワニトカゲ	B	A	A	B	中国原産の絶滅が危惧されるトカゲで、ペット目的での日本への密輸が絶えない種である。国内飼育個体数は一定程度あるため、状況を見ながら飼育下繁殖を進める。
	アルダブラゾウガメ	B	A	C	B	絶滅危惧種であるが、国内個体群は安定していることから、当園が喫緊に繁殖に取り組む必要性は低い。外観からも展示効果は高く、ゾウガメ類全般の保全に関する教育的な題材としても有用であることから継続した飼育が必要である。将来的には展示個体の持続的確保のため、繁殖も視野に入れるが、繁殖に供することが出来るオス個体の入手は困難を極めることから、引き続き情報収集を進める。
	モリセオレガメ	C	B	A	C	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。動物福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。
アカスジヤマガメ	C	B	A	A	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。動物福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。	
アルマジロトカゲ	B	A	A	B	南アフリカに生息する希少なトカゲ、形態が特徴的であるためペットとしての販売を目的とした密輸の対象となっている。日本がペット目的の生物の輸入が極めて多く、密輸事例も多い現状を広く知ってもらううえで非常に有用な種である。絶滅の緊急度は低いものの、展示個体群を確保するうえで、状況に応じて繁殖に取り組む必要がある。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	トゲチャクワラ	B	B	A	B	IUCNのレッドリストでは準絶滅危惧種に分類されているが、飼育下繁殖技術は確立されている。商業流通も見られるが、国内動物園水族館で飼育展示を行っているのは当園のみであり、展示個体確保の観点から必要に応じて繁殖に取り組む。
	アメリカドクカゲ	B	B	A	B	IUCNのレッドリストでは準絶滅危惧種に分類されており、飼育下繁殖技術の研究も途上の種である。当園は2017年に本種の繁殖に成功しており、引き続き繁殖のデータを蓄積し、技術確立を進めるべき種である。
	ヒョウモントカゲモドキ	C	B	A	A	トカゲ類の中でも最もポピュラーな飼育種の一つであり、保全上の必要性は低いが、動物福祉上の問題も生じづらく管理も容易である。展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。
	トッケイヤモリ	C	B	A	A	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	マツカサトカゲ	C	B	A	B	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	アオジタトカゲ	C	B	A	B	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来る。福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	エボシカメレオン	C	B	A	A	爬虫類の中でも特に認知度が高い分類群であり、その採食方法なども含めた展示効果は高い。爬虫類の進化の多様性を示すうえで有用な題材であることから、継続して飼育を行う。
	ミドリホソオオトカゲ	C	B	A	B	アオホソオオトカゲ同様樹上性のオオトカゲであり、本種の展示面での代替種としても有用な種である。動物福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体確保の観点から継続して飼育を行う。
	ツギオミカドヤモリ	C	B	A	A	ニューカレドニア固有種であり、またヤモリの仲間では最大種である。その外観などから高い展示効果が期待される。国内では当園でのみで飼育されており、継続的に飼育を行う。
	ミドリニシキヘビ	C	B	A	A	当園で飼育するヘビのうち唯一の完全樹上性のヘビ類。その生態や外観など高い展示効果が期待され、動物福祉上の問題も生じにくいいため、継続的に飼育を行う。
	ボールニシキヘビ	C	A	A	A	保全上の必要性は低いが、ヘビ類の中でも性質が温厚でサイズの的にも扱いやすいことから、ふれあい・実物教育に使用することができ、極めて有用性が高い。福祉上の問題も生じにくいいため、継続的に飼育すべき種である。
	ビルマニシキヘビ	B	A	C	A	大型で展示効果は高いが、現在の飼育展示施設は狭隘であり、施設の改善が必要となる。絶滅危惧種であるが飼育下繁殖も行われており、当園が積極的に繁殖に取り組む必要性は低い。多様な展示を維持するうえで飼育を継続する。
	オオアナコンダ	C	B	C	B	世界最大級のヘビで展示効果は高いが、現在の飼育展示施設は狭隘であり、施設の改善が必要となる。国内個体群は少ないが保全上の必要性は低く、多様な展示を維持するうえで飼育を継続する。
	キイロアナコンダ	C	B	A	B	比較的大型であるが、動物福祉上の問題も生じにくいことから、展示個体の確保の観点から継続して飼育を行う。
	ペーレンパイソン	C	B		B	ニューギニアの奥地に生息「幻のニシキヘビ」とも言われる。大型で金属的な美しい光沢があり展示効果は高い。飼育下での繁殖事例は少なく、今後の保全に向けた技術確立のため、継続的な飼育研究を行うべき種である。
	その他小中型ヘビ類	C	B	A	B	福祉上の問題を生じにくいいため、展示個体の確保の観点から複数種を継続的に飼育する。
	マダラスナボア	C	B	A	B	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークである。動物福祉上の問題も生じにくいいため、展示個体確保の観点から確保すべき種である。
	マダガスカルキンイロガエル	B	A	A	B	マダガスカルに生息する絶滅危惧種であり、マダガスカルの現状を伝えるうえで有用である。国内個体群は一定数おり、繁殖についても安定していることから、当園は展示個体確保を目的とした必要に応じた繁殖を進める。
	ヤドクガエル類	B	A	A	A	本種は有毒カエルとして広く認知されており、美しい外観と併せて展示効果は高い。カエル類は環境変化の影響を受けやすくその多くが絶滅危惧種であるなど、カエルの展示を通じた環境教育も可能である。当園ではこれまで多種において繁殖実績を有することから、他園館における飼育展示の基礎となっている。今後もこの繁殖技術を生かし、必要に応じて繁殖に取り組む。
	ミツツノコノハガエル	C	B	A	A	木の葉に擬態する特異な外観など、爬虫類・両生類館における動物を探す楽しみを提供するうえで有用な種であり、継続した飼育を行う。
	コケガエル	C	B	A	B	苔に擬態する特異な外観など、爬虫類・両生類館における動物を探す楽しみを提供するうえで有用な種であり、継続した飼育を行う。
	ミツコビアンフューマ	C	B	A	A	両生類として特異な形態を持ち、両生類の進化と多様性の題材として有用であることから、継続的な飼育展示をすべき種である。国内の飼育個体群は小さいが、商業流通も見られることから持続的な入手は可能である。

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
継続種	タイガーサラマンダー	C	B	A	A	陸生の有尾類としては最大種で、両生類の進化と多様性の題材として有用であることから、継続的な飼育展示をすべき種である。安定して飼育することが可能であり、多様な展示を維持するうえで有用な種である。
断念種	やむを得ず飼育を断念する種(断念種) 動物の福祉の確保や飼育の継続性について実現が困難であると判断される種、保全に関する取組と教育・メッセージについて類似の動物種と比較して効率的な資源(飼育スペース、資金、人員等)配分の観点から優位性が低いと判断される種については、将来的に飼育を断念します。 なお、ここに分類した種については、その種の生態、個々の動物の年齢や健康状態、繁殖の可能性等を考慮しながら、動物福祉の充実または飼育個体群の保全等につながることを期待できる他の動物園・水族館への移動を積極的に検討します。したがって、移動により、長期にわたる低福祉状態が予想される場合など、 保全上の必然性と当該個体の福祉の維持が見合わない場合は、円山動物園で福祉に配慮した飼育展示を継続することとし、当該動物が寿命を全うした後は、当該動物種の新規導入を行わないこととします。					
	エリマキキツネザル	B	A	B	B	生息地の破壊等により絶滅の危機に瀕しており保全の必要性は高く、教育展示の必要性もある。しかし、当園で飼育しているマダガスカルと同じキツネザル科のワオキツネザルと比較し、ワオキツネザルの方がより国内個体群が安定していることから、将来的な持続可能性を考慮し、ワオキツネザルの動物福祉向上のため、この種の飼育を断念する。
	クロザル	B	B	C	C	国内での飼育個体数は少なく、遺伝的多様性を保つのが極めて困難な状態となっている。一方、同じく熱帯雨林館で飼育中のシオザルは、国内飼育個体数がクロザルの5倍あり、遺伝子の多様性を保持できる可能性が残されている。 クロザルの飼育の持続性が困難なこと並びに熱帯雨林館のサル類の動物福祉の確保のためシオザルの飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	テナガザル	C	B	B	C	現在飼育中の個体は種間雑種であることが判明しており、種の保存の観点からはこの個体の血統を繁殖させていくことはできない。当該の個体を終生飼育した後は、この種の飼育を断念する。
	シンリンオオカミ	C	A	C	B	野生のシンリンオオカミは雌雄のつがいとその若齢仔からなる群れ(パック)を形成し、100平方キロメートルに及ぶ排他的な縄張りをもって暮らしている。群れの個体には雌雄それぞれの順位があり、繁殖は基本的に最上位の雌雄の間で行われることから、特に繁殖期前には激しい順位争いが起きることもあり、仔は一般的には性的に成熟する2歳頃には群れを離れ、つがいの相手を探す。 飼育下のシンリンオオカミにおいても、このような傾向は明らかにみられており、飼育個体間の順位争いが激化し、生命の安全のために群れや個体を分けて飼育せざるを得なくなるケースもしばしばある。当園においても仔個体が父親個体や兄弟個体に対して攻撃的な態度をとるようになったことから、他園への移動や別飼いににより対応しているが、限られた飼育スペースを分けて使用することとなるため、狭隘なスペースしか提供することが出来ていない。このような状況から、当園においては、本種について雌雄でつがいを形成させ、継代的に繁殖を行っていくことは非常に困難であると判断するに至り、この種の飼育を断念する。
	ヒマラヤグマ	B	B	B	C	日本に生息しているツキノワグマはヒマラヤグマの亜種であり、亜種についての説明がしやすい動物ではあるが、国内での飼育個体数が少なく、国内個体群の持続が困難である。現在飼育している個体は老齢のメス2頭であり、繁殖に供することはできないため、現在飼育している個体を終生飼育した後は、この種の飼育を断念する。
	ブチハイエナ	B	B	C	B	アフリカの草原に棲む中型肉食獣。国内での飼育個体数は少なく血縁関係の個体が多いため、国内個体群の維持が困難である。同じサバンナの肉食獣であるライオンの動物福祉向上のため、この種の飼育を断念する。
	サーバルキャット	C	B	B	B	アフリカの小型肉食獣であるが喫緊の保全上の必要性は低い。また、国内での飼育個体数は少なく、国内個体群の維持が困難である。他のアフリカ原産の哺乳類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	エランド	B	B	C	A	アフリカの草食獣であるが喫緊の保全上の必要性は低い。サバンナの現状を啓発するうえで教育上の重要性はあるが、同様の役割を担えるシマウマの飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	オグロプレーリードッグ	B	B	C	A	地中に巣穴を掘る生態が特徴的で、展示効果は高いが、喫緊の保全上の必要性は低い。また、今後子ども動物園は家畜種を中心とした動物の飼育を見込んでいることから、この種の飼育を断念する。
	アメリカビーバー	C	A	C	B	木を伐りダムをつくるなど生態が特徴的で、毛皮の利用のために乱獲された歴史があるなど教育的効果も高いが、現在飼育中の個体は国内最高齢の老齢個体であり、子ども動物園は今後、家畜種を中心とした動物を飼育することを見込んでいることから、当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
ポニー	C	B	B	A	海外産の家畜種であり、子ども動物園での中型家畜種として飼育している。ふれあいでできる中型家畜種に関し、北海道の動物園での飼育意義を鑑みると、どさんこ馬の方がより教育的効果が高いと考えられ、将来的に他種馬へ切り替えることを想定し、この種の飼育を断念する。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
断念種	ゼニガタアザラシ	B	A	B	B	飼育下個体群の遺伝的多様性の維持や個体群動態的な健全性の維持にあたっては現集団の規模はもちろんのこと、計画的な繁殖推進のための個体移動の流動性が重要となるが、飼育園館が多く個体の流動性が高いゴマフアザラシに比べ、ゼニガタアザラシは飼育園館が少なく、また、環境省で実施している有害獣捕獲事業で捕獲された野生個体が飼育キャパシティを圧迫していることから、個体流動性が低下している。 この状況から、ゴマフアザラシの飼育と比較検討し、ゴマフアザラシを維持種とし、ゼニガタアザラシについては断念種とする。
	モモイロインコ、ナナクサインコ	C	B	B	B	ワシントン条約で国際取引は規制されているものの、喫緊の保全上の必要性は低く、ブリーダー等の繁殖個体がペットとして流通している。他の希少鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	イヌワシ	B	A	C	B	国内希少種として、動物園における域外保全が必要であり、教育面においても有用な種であるが、基本的に他のワシ類等との雑居が不可能であり、他の優先すべき種と飼育スペースが競合すること、現在飼育中の他のワシ類と異なり、道内が主たる生息地ではないことから、他の猛禽類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	ツミ	C	A	B	B	国内普通種であるが、入手は困難で国内飼育個体群の維持が難しい。また、喫緊の保全上の必要性は低い。他の猛禽類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	アカツクシガモ	C	B	B	A	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。北海道の湖沼に生息する水鳥の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	シュバシコウ	C	B	B	C	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。アフリカ原産の鳥類であるが、アフリカゾーンには当該種を飼育するエリアが無く、また、大型種であるため動物福祉を確保するためには一定の飼育面積を必要とするため、北海道に生息する鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	ナキサイチョウ	C	B	B	C	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。国内園館では数羽しか飼育されておらず、海外からの導入も困難であることから、他のアフリカ原産の鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	サンショクキムネオオハシ	C	B	B	C	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。国内に数羽しか飼育されておらず、当園でも長年単性飼育となっている。海外からの導入も困難であることから、他のアフリカ原産の鳥類の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。
	アメリカワシミズク	C	B	B	B	海外普通種であり、喫緊の保全上の必要性は低い。形態や生態が類似種であるユーラシアワシミズクと重なっており、希少種である同種の動物福祉向上のため、この種の飼育を断念する。
	インドクジャク	C	B	B	A	特異な外観や求愛様式など、展示上の効果は高いが、大型種であるため動物福祉を確保するためには一定の飼育面積を必要とする。隣接するフラミンゴの動物福祉向上のため、この種の飼育を断念する。
	外国産小型鳥類	C	B	B	B	多様な鳥類を数多く飼育展示することにより高い教育展示効果が期待できるが、近年外国産鳥類は入手が困難となってきた。この種の飼育継続性・和鳥の飼育と比較検討し、この種の飼育を断念する。 (ノドグロコウカンチョウ、セイキムドリ、キュウカンチョウ、サトウチョウ等)
	コールドック	C	B	B	A	品種改良を加えられた家畜種として、人と動物との関わりについて説明ができ、かつ、ふれあいや体験プログラムに供することが可能だが、子ども動物園において今後、水禽種の福祉を充実させた展示を行うことが難しいことから、この種の飼育を断念する。
	シナガチョウ	C	B	B	A	中国で家畜化され、番犬替わりに飼育されていたことで知られている。子ども動物園において今後、水禽種の福祉を充実させた展示を行うことが難しいことから、この種の飼育を断念する。
	ミズオオトカゲ	C	B	C	A	大型で非常に活動的であるため展示効果は高いが、飼育施設は狭隘で動物福祉レベルの高い環境を提供するのは困難である。当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
	ニシキセタカガメ	B	A	A	C	絶滅危惧種で国際的にも保全が進められている種だが、当園は1頭のみ単性飼育となっており、国内に他の飼育個体がおらず、また国際的にもアメリカの動物園でオス数頭が飼育されているのみと、入手が極めて困難である。保全上の取組の目的が立つまでは当園において維持すべき種であるが、当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
	インドホシガメ	B	A	B	A	絶滅危惧種であるものの、国内ではすでに繁殖技術も確立されており多数が飼育されていることから、当園がこれから取り組む必要性は低い。現在のところ教育面においては、密輸などの問題を抱えるなど教育上の有用性は高いことから、現個体の飼育は継続するが、当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
オマキトカゲ	C	B	B	C	分類学的には特殊な位置にあり、また形態的にもユニークであるため、展示効果を期待することが出来るが、入手が困難であり国内個体群の維持が困難である。当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。	
アマメニシキヘビ	C	B	C	A	大型で展示効果は高いが、一方で現在の飼育展示施設は手狭であり、今後動物福祉上の問題を生じる可能性がある。保全上の必要性は低く、また商業的に流通しており、当園が積極的に繁殖に取り組む必要性は低い。当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。	

	種名	保全	教育	福祉	継続性	分類の理由
断念種	コイチョウイボイモリ	C	B	A	B	当園で唯一のイモリであり分類学的に必要な種である。今後は JAZA により域外保全が実施されている日本産のイボイモリに変更することも想定されるが、当面の間は本種を飼育展示する。当該個体を終生飼育し、その後この種の飼育を断念する。
	アジアアロワナ	B	A	C	A	野生では乱獲により数を減らしており、オスが口の中で子育てをするなどの特徴を持ち、教育的効果は高いが、認可を受けた養殖場での繁殖は行われており、当園における積極的な繁殖の推進が求められる種ではない。また、現在の飼育環境は過密であり、福祉の確保が十分とは言えない。隣接するコツメカワウソの動物福祉向上のため、この種の飼育を断念する。

II 市民動物園会議における意見交換

本会議は、円山動物園の運営方針について審議するために、札幌市附属機関設置条例（平成 26 年 10 月 6 日 条例第 43 号）に基づき設置された附属機関で、動物園支援に携わる関係者、学識経験者などから構成されています。会議では、第一次実施計画案について意見交換をしていただきました。

【委員名簿】（五十音順、敬称略）

氏名	所属等	
委員長 吉中 厚裕	酪農学園大学農食環境学群 環境共生学類国際理解学研究室 准教授	
委員	相原 基大	北海道大学経済学研究院 准教授
	有坂 美紀	RCE 北海道道央圏協議会 事務局長
	伊藤 秀倫	フリーランス（編集） <市民委員>
	後山 直久	株式会社テレビ北海道 事業部部長
	太田 明子	太田朋子ビジネス工房 経営コンサルタント <市民委員>
	金沢 柚子	札幌市山の上病院 作業療法士 <市民委員>
	土田 史郎	一般社団法人札幌観光協会 事務局長
	宮本 尚	NPO 法人北海道市民環境ネットワーク 理事
	矢野 信一	円山西町町内会 会長

【市民動物園会議の開催状況】

開催日	主な協議内容
令和元年 11 月 28 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第一次実施計画（案）の説明 ・ 策定に向けた検討スケジュールについて

Ⅲ パブリックコメントの実施結果

(1) 実施概要

実施期間	2020年（令和2年）2月7日～3月8日（31日間）
配布場所	札幌市円山動物園 札幌市市役所本庁舎2階 市政刊行物コーナー 各区役所（総務企画課広聴係） 各まちづくりセンター 環境プラザ（北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2階）
意見提出者	9人、49件

(2) 意見内容の内訳

分類	意見数	構成比
「ビジョン 2050 第1次実施計画」(案)に対して寄せられた意見		
「ビジョン 2050 第1次実施計画」全体	0件	0.0%
第1章 ビジョン 2050 第1次実施計画の策定にあたって	0件	0.0%
第2章 円山動物園のこれまでの取組と今後の展開	7件	14.3%
第3章 具体的な事業と取組の展開	18件	36.7%
1 具体的な事業と取組		
(1)「保全」を推進する事業・取組	(1件)	(2.0%)
(2)「教育」を推進する事業・取組	(1件)	(2.0%)
(3)「調査・研究」を推進する事業・取組	(0件)	(0.0%)
(4)「リ・クリエイション」を推進する事業・取組	(7件)	(14.3%)
2 取組の根幹【動物福祉】を推進する事業と取組	(0件)	(0.0%)
3 基本理念を実現するための基盤を支える事業と取組	(9件)	(18.4%)
第4章 第1次実施計画の推進にあたって	0件	0.0%
第5章 検討経過	0件	0.0%
その他の意見	24件	49.0%
合計	49件	100.0%